



母のかしわ蕎麦

北海道・会社員
吉井 泉

亡き母の50年前の蕎麦の味と温もりは今も忘れられない思い出です。当時、我家は釧路から50km離れた田舎町、駅から歩いて30分程の町外れで木材業を営み、時々、取引会社の支店長や課長さん達が来訪。しかし、田舎には食堂と云えるものは無く、昼夜の食事は我家で母の手料理が定番であった。

母は気さくで親生まれ料理も得意、中でも蕎麦は手打ちで自慢の一つ、我家には当時は希少の電話があり、来訪時はいつも支店長直々に「奥さんのかしわ蕎麦と鶏の丸煮が食べたい！蕎麦は昼も夜もね！」と頼まれた。

母は学校から帰った私に鶏をつぶす（殺す）様にと言い、私は鶏が可哀そうで躊躇った思い出があります。今はスーパーや肉屋さんで買う時代、当時は家の鶏は食べるために飼いそれが当たり前でご馳走でもありました。

その「かしわ蕎麦」支店長さんの「いつもながら美味しい！もう一杯！」の声に母の嬉しそうな顔。私も食べさせてもらい鶏が可哀そうと思ったことも忘れ、本当に美味しかった。母の笑顔と母と汁の温もり味と匂い、今も記憶に焼き付いている。

数年後就職して釧路で食べた老舗の「かしわ蕎麦」半世紀を経て今食べると「かしわ蕎麦」これもまた美味しい。しかし、あの母の「かしわ蕎麦」は何とも言えない別格な味です。昨今は蕎麦にうどんにパスタ等手打ちブーム。私も6年程前から蕎麦打ちに凝り、母の味を追い求め家族で楽しんでおります。

麺は庶民の食べ物として昔から日本人は勿論世界中で色々な食べ方で多くの人に愛され食され、麺食文化が築かれている。

これからも麺の如きに細く長く、人の暮らしとともに未来永劫、引き継がれることを確信。

麺との出会いに感謝！有難う。

奨励賞